

転船命令

清水静夫
上鷲宮五丁目

それはもう半世紀、四七年も前の事。

昭和十九年十月六日、私達はバシー海峡（台湾とフィリピンとの間）を、シンガポールに向けて南下している輸送船上にいた。

満州の牡丹江で初年兵教育を受け、幹部候補生試験を経て経理部幹部候補生となり、南方軍要員にされ、シンガポール（当時、昭南と言った）に在る経理学校へ入校するため移動中であつた。

満州全域に展開していた各師団から同じ様に転属させられた者は、東満地区は凶們（朝鮮との国境近く、ソ連のウラジオストックにも近い）に、北満その他地区は奉天（瀋陽）に集合、それぞれ朝鮮半島を南へ縦断、釜山を経て門司に到着合流した。九月二〇日頃の事。

門司の松ヶ江廠舎で輸送船を待つ十日ばかりの間、敵潜水艦、航空機の早期発見と伝達訓練、遭難時の縄梯子降下訓練、救命綱の取扱訓練等々、そして補充司令部将校の講話。

「お前達は非常に幸せである。最近の輸送船団は、戦艦、航空母艦、巡洋艦、更に駆逐艦までが何重にもぐるりと取り巻いて行くのだから、全く安全そのもの。比処での各種訓練は、只念の為にやっているに過ぎないものである……」

誰もが虚偽だと思ひながら、他方ではそう有つて欲しいという願望から、半信半疑の気持ちであつただろう。

輸送船団は一つだけではない。数多くの船団が編成されて、大陸や南方各地に向けて出ている筈。海軍は太平洋全域に広く展開して、米國を主力とした連合軍海軍と対峙している筈。従つて戦艦や航空母艦を始め、数多くの軍艦を船団護衛に割ける訳が無い。そんな余裕が我が海軍に有るとは到底思えない。

ましてミッドウェー海戦以来、我が海軍の戦力は極度におちているという風説さえあつた。南方へ送り出されて行く者に、僅かなりと安心感を与えてやろうという親心で、こんな見え透いた虚偽を言っていたのだろう。

乗船の日が来た。乗船間際になつて、同じ師団から来た私達

二〇名全員に、乗船予定の船でなく別の船に乗る様命令が来た。これが生死を分ける別れ目だったとは、神ならぬ身、誰一人知らなかった。私達幹候生は集合地（凶們と奉天）別に、二船に分かれて乗る事になっていた。

同じ師団から来た二〇名の者は怒り出した。

「なに！ 我々に奉天組と合流せいと言うのか。そんな馬鹿な事があるか。我々は凶們集合組の連中とずっと一緒に行動して来たんだ。輸送指揮官に交渉して来てくれ、嫌だと言って」

東満地区から来た凶們集合組の人数が多く、一部を奉天集合組と合流させ、二船に乗る候補生を同数にしようとした。以前に全員を一船に乗せ、それが撃沈されて全員戦死した事があり、その轍を踏まない様、今回は二隻に半数ずつ分乗させる事にしたらしい。

それにしても、寄りによって我々を向こうの船に追い出すとは何事かと文句が出、分隊長職をしていた私は皆に急ぎ立てられ、輸送指揮官に取り消しを求めに行った。

「これは命令だ！」の一言で、鎧袖がしゆ一触、追い返された。

十月一日夜半、輸送船は動き出した。

私達が少年の頃、本で読んだり聞いたりした輸送船は、港は宇品（広島県）、大勢の人の歓呼の声と打ち振る旗波に送られ、白昼堂々と船出して行った。然し、私達の乗った船は、人の寝静まった夜半、抜き足差し足音を立てない様に、静かに岸壁を

離れた。

「ああ、堂々の輸送船

さらば、祖国よ栄あれ」

あの「あかつきに祈る」の歌の世界ではなかった。全く、夜逃げ」そのものであった。

船団は殆んど一万トン級の油槽船で構成され、三縦列に並び、左右が四隻ずつ、中央が五隻計十三隻。西洋では忌み数である。護衛艦は、戦艦、航空母艦どころか、駆逐艦すらいない。五百トン程度の海防艦、駆潜艇が五隻いただけであった。

私達が乗った船は、右列の三隻目。当初乗る予定で、候補生の半数が乗っている船は、中央列の三隻目、直ぐ横を進んでいた。その船を眺めながら、身の不運を託たくっていた。左右の船列がバリケードの役目をするから、中央列の方が遙かに安全だなあと羨ましい気持で見ている。

三日目、台風に見舞われた。一万トン程度の船では木の葉の様に揺れた。だが、潜水艦も航空機も襲って来る筈が無いと思えるので、船上にいた者は一様に安堵感を持っていた。同時に、やはり緊張しているのだろう、誰一人船酔いする者はいなかった。釜山から門司迄の船上では、多数の船酔い患者がいたのに。五日目、夜遅く七、八機の敵機が爆撃にきた。小さな護衛艦の打ち出す機関砲以外抵抗する術の無い船団は、唯ひたすらシンガポールに向けて走るだけであった。船上では逃げ隠れる

所が無い。まして油槽船では身を隠す所も無い。甲板上に坐しているだけであつた。即席の宗教人になつて、爆弾が命中しない様神仏に祈るだけであつた。不敵にも、翼灯を付けたままで飛び回つていた敵機を目で追つていただけであつた。近くに落ちた爆弾の水柱で何度か水を浴びた。それでも幸運なことに、どの船にも一発も当たらず、そのうちに敵機は去つて行つた。

六日目、バシー海峡に入つていた。快晴、波静か。こんな日は潜水艦や航空機が襲つて来るかも知れん、気を付けなきゃと思ひながらも、既に全身に虱が湧き、その痒さにたまらず私は虱取りを始めた。

航海中は、万一に備へ海中での冷え込み防止の為、軍服は勿論外套迄着込み、脱ぐ事を禁じられていた。だが、だからと言つて我慢出来る痒さではなかつた。外套、軍服は勿論、下着も脱ぎ、裸に近い姿で虱取りに専念し出した。日陰を求めて三三五五、数百の者が虱取りに専念していた。

「船べりで虱をつぶす麗かさ」

と、江戸の古川柳にある。そんな長閑な一時であつた。

突然、ざわめきが起きた。言葉とも叫びとも取れないざわめきが辺りに湧き起こつた。誰もが反射的に事態を理解した。皆一斉に衣服を身に付け、人の流れに沿ひ左舷へ走つた。

左舷の手摺は兵隊で一杯だつた。その目は数百メートル離れた所に揚がつた四本の水柱に吸ひ付けられていた。どれ程の

時間なのか、立ち登つた水柱は吹き上がる噴水の様で中々崩れず、それ自体爆発の物凄さを示していた。

この水柱が崩れ落ちた時、船は赤い船底をこちらに向けて、向こうへ横倒しになつていた。

「あつ、大変だ！」

私の口から言葉が飛び出した。あの船には、自分達と一緒に凶們で集合し、釜山を経て門司まで来、松ヶ江廠舎で一緒に暮らした候補生達が乗っている事が頭に閃いたから。

周りの者も口々に何か叫んでいた。相槌を求めて言葉を発しているのではない。どうしようもない焦燥、事の重大さで、言葉が、声が勝手に口から出ているのだろう。居ても立っても居られない衝動に駆られながらも、海上では、船上では、唯手をこまねいて見ているしか仕様の無い、そのもどかしさに精神の倒錯する思いがした。

船は狂つた様に汽笛を鳴らし続け、ジグザグに走り、而も現場から離れようと全速で努めていた。全速でも時速十ノットのもどかしさはあつたが、それでも徐々に遭難船から離れて行つた。

一人でも多く助かつてくれと心で祈る事しか出来ない私達であつた。

本来、あの遭難船に乗っている筈だつたのに、単なる員数合わせの徒で、乗船間際に別の船に乗せられ、その時は身の不運

を託^{たく}ち、輸送指揮官に文句を言い、変更を申し出た程なのに、こんな事態になってしまった。而も安全度は比較的に高いと思われた中央列の船がやられた。

「人間万事塞翁が馬」と言う。

「禍福は糾^{あざな}える繩の如し」とも言う。

浅はかな人智では解明の仕様の無い現象に、古代の人も戸惑ったのだろう、こんな名言を残してくれている。

あれから既に半世紀近く、だが未だ昨日の事のように鮮明に頭にこびり付いている。

一旦は死んだ筈だから、その後は余生の様なものとはとても達観出来ない私でも、時にはあの瞬間^{とき}を想い、不運にも水漬く屍となった同僚百五〇名の冥福を祈らずにはおられないでいる。

合 掌

